大和魂

——日本保衛の為の忠言——

目次

序言……5
神々の啓示……13
(1) 天照大神啓示……13
大和の目差すもの——禍災減免の機運をつかめ——富士山祈禱の目的は何か——核戦争対応の準備をいそげ——天帝皇語と廻向文
(2) 神武天王啓示……21
大和民族の使命——陰霊の衝動が核戦争を触発させる——目前に迫る子々孫々への患禍——覚悟すべき残酷な事実
(3) 大日如来啓示……26
不安な血の円盤——雪中炭を送る台湾の同胞——冷えきった北の空——光殿の偉大な霊験

(4) 日蓮上人啓示……32
〝道徳〟は飾りものではない——宗教大同を説く首席使者——二十字真言による養性——転換期に到った物質的享楽——修行すなわち正気——危機去ってのこるは空か——富士祈禱に霊光を見た——白日は黒夜に変る——大和民族の反省
(5) 不動明王啓示……47
陰気はげしい東京の空——酔生から醒めよ——富士祈禱にみつけた一縷の希望——何故の祈禱か——
(6) 富士山山王啓示……55
朝に道を聴く
(7) 地蔵王菩薩啓示（結語）……56
中国語原文（略）……65
編集後記……66

序　言

われわれ天帝教の教綱第三章天人親和第十三条の教魂は次のように教示する：

人類が有形の肉体をもって無形の霊界――精神世界――との相互接近を求める努力は、古くから絶えることなく進められ、宇宙のあるべき究局真理への探求が企求されてきた……今日に至るや、科学技術の発展は遥か太空圏の領域にまで伸び、音・光・化学・電子に関する発明により――宇宙の真理は一歩々々解明されてきており、天人交流に対する有力な保証のもと、霊界へのより深い模索が継続されている。天と人との距離は時代の巨大な歯車に随って日々短縮され、有形の宇宙と無形の宇宙に向かっての永い無止境の最後の真理が最終的に究明され、天人大同の理想が促進される日も、いずれ近く現実のものとなろう。

この末劫の世、世界核戦争は一触即発の辺淵にあり、人類破滅の危機は頭上に迫っている今日、本教は気運に応じて人間界に再現し来たって、天地を改造し、新たな機縁を創造しようとするものであるが、今後、天人接触が頻繁となるにともない、任務の重要さは日々加重されてきている。時代の需要にこたえて天人の距離短縮に努力することこそ、本教の負う時代的使命と云うべきである。

本教発祥の地、蓮菜の仙島を確保し、進んで天下蒼生の危急を救い、核による地球壊滅を解化する特殊任務を達成するために、当然のことながら天人親和を強化して、天帝の真道を流布し、天帝の意旨を明らかにさとし、宇宙最後の真理を探求し、本教の教務を充実することが主要な目標となってくる……と。

さきに教綱規定によって、相前後し専才に合格抜擢された楊光寶・荘敏潔の両名は、無形の指名特派をうけ霊師としての訓練養成を終え、精神科学と自然科学を運用し、物心相互の調整を通じて有形の肉体と無形の霊魂とを合体させ、直接媒介による天人貫通交流の大任を負うて、天下蒼生を救済し、核による壊滅大劫を解消延伸するために奮闘している。

米ソ両超大国の核決戦が、いつ何時触発するか測り知れぬ緊迫の今日にあって、茫然無

知の人類は、なおも無止境の物欲を満足させることに汲々とし、自らを救い他をも度すことには一顧すらの暇もない。

考えてもみよ！　この弾丸黒子の地球にあって、人類が互いに相争い殺し合うことが、世界壊滅、自他共に亡び去る日を招かないですむものであろうか。

壊滅的大戦がひとたび爆発すれば、日本はアジアと世界の重要戦略地位にあるため、まさに最初の矢面に立たされることは必至となろう。当然、早急に緊急事態の解消と自救の道を謀るべきではあるまいか。

この鍵ともいうべき時に当たり、本教上帝は蒼生救済を念願されておられる。日本の前途の挽救を期して、私は高齢をも省みず特に東京に参り、世界の人々に向かい、特に日本の人々に対し、早急に心底から自らを救い、共に天帝の真道を奉じ、精神の再建、道徳の再整に向かって邁進するよう呼びかけると共に、富士山で人類滅亡の危機解消のための拡大祈禱大会の開催を計画し、天人の感応に頼って、宇宙主宰の天帝が至高無形の神媒力で、今日世界禍乱の根源ともなっている無神論者ソ連をして、正常な理智に立ち戻り、人を亡ぼし自らをも葬り去る壊滅戦争を軽々に発動せしめないよう祈念することを決意した。

私は東京到着後、日本の気象専門家相楽正俊氏が学理経験にもとづき富士山の九月爆発・東京大地震という非常事態を予測していることを知り、その推測の正確さと、深く広い学識に敬服した。私は人類が現在に至るも未だに大自然の迫害を克服する術をもたず、ただ至誠感応の力のみが無形の妙運をえて災害を解消し軽減できるものと確信しているが故に、今回当初予定していた「人類壊滅の危機解消祈禱大会」に「日本の重大天災軽減」の祈りをも併わせ行うことにした。

本教の「人類壊滅の危機解消・日本重大天災軽減祈禱拡大会」は、九月四日正午、富士山標高二四〇〇メートルの新五合目で開催された。前後三時間に及ぶ荘厳盛大な祭典は、本教台湾からの信徒代表五十余名のほか日本側から各宗教代表、各界代表数百名の参加をえて、情緒悲荘な祈りと誦号のうちに円満に終了した。

事実はわれわれに次のことを告げる。この祈禱祭典は富士山においては未曽有のことであり、宇宙最古の宗教たる天帝教が主催し、中国人によって主持され、さらに参加した老若男女の中国人は心を出し、力を出し、銭を出し、ひたすらな誠意をもって白雲深処の高山に到り、人類壊滅危機解消・日本重大天災軽減のために祈禱したのである。

特に祈禱が進むうち、天帝の聖号を朗誦した際、祈禱に参加した本教の信徒たちは、迫り来る大劫の恐るべき事態に想いをいたし、哀求の声の中で真情が吐露され、悲しみは涙と流れ、ついには朗誦も声にならず、湧きおこる悲哀の気と感動が全会場を覆った。無形のうち参加されている仙仏聖尊も同様に涕泣され、天人ともに同じ悲しみを嘆き、世にも稀な感動的場面が出現したのである。

祈禱当日の夜、本院の日本臨時光殿には、日本護督の五位の神仏、天照大神・神武天王・日蓮上人・大日如来・不動明王の降臨があった。天人交流の方法によって日本同胞に向かい、心頭の鬱積を吐き出し誘導警告を行うようお願いした。私はこの五位の神仏のご心境を察し、かつこの機縁のえがたいものであることを深く感じ、ただちに台湾信徒代表楊子光贊に向かって接霊のため筆をとるように命じた。光贊は開業医師で急遽帰台しなければならない立場であったが、労苦を辞せず、日夜天人との親和交流をはたし、遂に三日で使命を完成した。しかも私は天照大神とご相談の結果、この五位の神仏の教示を日中両文並記し書名を「大和吼声」と題して、本教東京事務所から初版一万部発行、無料贈呈して趣旨のより広い伝道を図ることにした。

日本に降臨された五位の大神仏が日本の古い歴史に占める因縁は、その啓示の中に自ら明白に示されており、その日本同胞への懐念と期待がいかに深く激しいものであるか、恐らく日本国民の未だ見聞しえなかったところであろう。この書が日本大和民族のため後世永く不滅の文献となることを確信する。

私は天命を奉じ半年前の七月十五日、はじめて日本を訪問した。今回の訪日目的は一旅行者として許される最長半ケ年の滞在期間において、伝道ということよりも、むしろ天帝の真道を宣揚して、有縁の人々を救い求めることにあった。一切の費用は富士山祈禱大会および本書刊行費をも含み、すべて台湾の信徒からの寄進で充当され、日本国民さらに華僑からの好意の喜捨さえ一切拝辞している。私はなすべきことをなし、語るべきことを語り、結果は問わず、代償は計らず、ひたすらわが心に愧なからんことを求めた。ここに本書が印刷に付され刊行されるに当たり、特に来日した本教の願望と祈禱大会の経緯はじめ、本書刊行の由来など略述して、日本の皆様にお伝えする次第である。

なお最後に申し添えておきたいことは、富士山祈禱大会が予想外の成功を収めたことである。そもそも祈禱の第一目的である——人類壊滅の危機解消ということは、事が世界的

大局にかかわる問題だけに、直ちに祈禱の成果が眼に見えて現われるといったものではない。しかし第二目的である――日本重大天災の軽減ということについては、相楽氏の発表を見、私自らも静思の中で氏の推測が根拠のあるものと観じたため、特に災害の一半なりとも軽減されるよう祈禱した。

はからずも祈禱に現われた天人親和精誠の霊感は特に激しいものとなり、もともと九月十一日から十五日までに大爆発を起こすはずの富士山は、無形のうちに変化を生じ、天帝の慈悲をうけて特にその時期を「暫く緩める」ことになった。このことは相楽氏推測の不正確さを示すものではなく、上帝が日本同胞を憐れみ、暫く時期をずらして人心の動向を見定めようとするご配慮にもとづくものであり、さらには本教の長時間にわたる祈禱が示した精誠感応の力の不思議さを示すものである。

同時に日本国民に謹しんで申し上げる。天照大神・神武天王・日蓮上人・大日如来・不動明王の五位の大神仏は、いずれも未来の大劫の様態を知り抜き、無形の中で日本の前途を救うため奔走呼号されておられる。そのご労苦を無駄にしては申し訳けないことだ。幸いにも、天帝の配慮による機縁をうけて、五位の大神仏が本教の光殿に降臨され、お心を

伝達し天機をおもらしになった。この書が広く日本社会に読まれ大衆に受け容れられることになれば、それこそ五位の大神仏の温いご配慮に応え、また日本の非常な幸いともいうべきことであると痛感する次第であります。

天帝教駐人間首席使者涵静老人李玉階八十三歳、昭和五十八年（一九八三）九月十九日、日本清平殿清虚妙境にて序言を記す。

神々の啓示

(1)、天照大神啓示

大和の目差すもの

精神界の主宰者として宇宙渾沌の初めより、日本気運の調和を図ってきたが、多くの日本人は次第に大和民族としての責任を忘れ去ってしまった。

日本民族を何故に大和民族と称するのか？　それは民族自体のもつ大きな因縁があってのことである。日本民族の源流は、中国黄漢の血統をひくものであり、中華民族と日本本土の土着民族との混和してなったものである。つまり、原始以来日本人は、その血液の中に中国古来の道徳が流れる優れた特徴をもっており、中華に対する潜在的慕念は各世代にわたり継承されてきた。この心情は誠に不可思議なことである。

周囲海にかこまれた痩せた島国の中で、生活しつづけてきた日本民族は、生存競争の中

で特殊な個性を形成してきた。それは極端な固執と協同団結自衛の精神である。

日本人が大和民族たるためには、日本人のもつ極端性を昇華させ、〃大和〃精神による和平・和祥・和諧を求める態度で世界大同を促進するという最終目標を達成することが期待される。しかし、日本人の中華民族への対応は、〃大和〃の理想を実現しないばかりか、かえって最も悪い反応を示した。それは一種の歴史上かつてない末期的戦争行為——侵略であった。こうした同胞互いに傷つけ合う状況は、私どもの堪え難い痛苦であった。

ただ今、天帝の使者は、日本がまさに大災劫を受けようとする危急の時に決然として来日されている、ご高配のほどは胆に銘じるとともに誠に慚愧にたえず感泣するのみである。

禍災減免の機運をつかめ

富士山の危機は一種の前徴にすぎない。来たるべき真の禍災はまさに怕るべき状景を呈することになろう。日本は劫を受ける大きな刑場と化すであろう。北方のキナ臭さは、くすぶり続けて人間の耳目を塞ぎ、多くの日本人をツンボ座敷に押し込めている。

最近発生した大韓航空機事故は、日本人に警告するものではないか。快楽の日々は、あ

とそう多くは残されていない。当然万全の対応準備を致さねばなるまい。現在の戦争は一瞬の核戦争である。広島・長崎での原爆の劫災が、依然存在し続いている現在、核の惨状恐怖は往時広島・長崎のそれに比べ、千百万倍にも及ぶことを想わねばならない。今後の戦争は従来の戦争に比べ、より良好な〝機会〟、つまり機縁をつかんで、破滅的な損壊を免れるための対応が必要になる。しかし、日本にはこの種の無形の機縁が配慮されていない。日本に及ぶ禍害を減免させるために、日本人が良好な機運創造のために努力するよう衷心から希望する。

この種の良好な機運と契機の追求は、一刻の猶予もならぬ大事である。天帝が人間界に派した首席使者が来日されたのは、こうした破滅的危機軽減・解消の方法を提供するためのものである。

（旧暦七月二十八日・昭和五八・九・五）

富士山祈禱の目的は何か

新五合目（富士山）での祈禱大会は私に視界を開かせた。私は〝天照〟に勅封されてい

るが、祈禱会において、はじめて真の〝天照〟の意味を悟ることができた。

ただ無私・無偏・無我・無人・無寿・無衆生・無相の布施のみが真の布施である。日本の宗教団体の数は極めて多い。その多くが、信徒の招致奪いあいのためには余力ないまでに力を傾けている。教堂を壮大にし、基金を吸収するため大いに俗情が利用され、そのため真の布施と修道の道理がとっくに失われている。宗教的信仰は、赤子の心情をもって活動に参加するものであり、宗教活動は果実と代償を求めてはならないものである。今回の富士山祈禱会にみる場合、台湾から来訪した上帝の首席使者宇宙の最高霊能者こそは、真の布施者であった。

天帝教の信徒同奮の皆さんが訪日したのには、どんな目的があってのことなのか。私は日本の同胞にはっきりと次のことを語っておかねばならない。

㈠、彼らは富士山頂で祈禱会を開いているが、彼らが何を祈禱したものか、皆さんは知っているだろうか。

彼らの祈求するものは、次の諸点にあった。

①、将来、または緊急に日本を襲う災劫を軽減解消するために、多くの日本の同胞が

彼らに対応して立ちあがること。

②、富士山と東京での災厄を軽減するために日本の全宗教界が共同して祈禱に合流すること。

③、「以徳報怨」の心情を以て、首席使者は台湾の信徒同奮を伴い、最大の代価と犠牲を惜しまず、日本と全世界の将来のために祈禱した。

④、祈禱の力量により天界・仏界の無形の神明に感動がおこり、これにより日本の善良な大衆が保護されることを希求した。

㈡、彼らは台湾から来て、日本人から寄付を募集しただろうか？　日本人に金を使わせただろうか？　個人の名を売りこもうとしただろうか？　信徒の吸収を考えたであろうか？　政治的行動があっただろうか？　なんらかためにする企図があったであろうか？

私が言いたいことは、彼らは神明の化身であり、彼らには少しも、為にする意図はなく、彼らの嘆きは天性に発したものである。彼らの祈禱に関心を寄せて合流する者は極めて少数であったが、彼らは黙々として天帝の道を耕し続けた。彼らの訪日は決して伝教を目的とするものではなかったが、日本人に対し大災禍が頭上に落ちかかっ

ており、早急な対応準備が必要なことを忠告して、その覚醒を喚起しようとしているのだ。

富士山が爆発するとか、しないとかの問題は、彼らの訪日目的からすれば必ずしも重要ではないのだが、富士山で祈禱を行うというのは、この山が日本精神を代表する高山であることによる。

私は光賛の霊覚によって、自分の気持を書き出させているが、これとても私の感動の万分一をも現わすものではない。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

核戦争対応の準備をいそげ

大劫が現われるときには、必ず異変現象がある。異変現象とは、突発的な天災人禍をいう。今年おきた次の大きな事態を通常の時と比較して考えてみよう。

㈠、気象の変化が極めて異常ではないか。

㈡、国際的な確執が増加しているではないか。

(三)、たえず重大な事故が発生しつづいていないか。
(四)、情緒不安が増し、異常に狂燥ではないか。
(五)、ある種の圧迫感から緊張のゆるめようがないのではあるまいか。
(六)、世間にいわゆる〝霊能者〟が、ますます多く現われていないか。
(七)、日本の前途に関する予言に不安をおぼえないか。
(八)、君自身一種の不安な予感はないか。
(九)、宗教的な問題を考えたことはないか。真の帰依を得たいと希望しないか？

もし、君が国際的大事に関心をもち、まえに述べた予感を抱いたとすれば、君こそ上帝が急ぎ求めている有縁の人である。早急に首席使者に面接することを勧める。君が知りたいと思うすべてのことが必ず会得でき、満足と安心が与えられるものと信じる。

私は最後にこう提示しておこう：こうした時代は〝末世の時代がやってくる〟といったいたずらな呼びかけのみに終わる時期ではなく、共に祈禱奮闘して、人道的には核戦争対応の準備を進め、天道の面では無形の正気を発揮すべき時機である、と。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

天帝皇誥と廻向文

多くの日本人は無形の宇宙主宰神の聖号を知らない。さらに、この宇宙最高の主宰神が宇宙規律を調和している天帝であり、無形を有形に変えうる力で、五大宗教つまり道教・仏教・儒教・回教・キリスト教を地球上のそれぞれの地区へ、時代に応じて降下させていることを知っていない。

天帝の首席使者は、私に祈禱礼拝の皇誥を日本人に紹介してもらいたい旨を伝えている。皇誥というのは、上帝の称号で、諸君の誠心誠意から出る哀求は、首席使者の設けた光殿を通じてのみ、直接上帝に達するものであり、その力は電光のように迅速であり、言いようもないほどの霊妙さをもっている。私も光殿で上帝の光芒に洗われ、光殿の至尊を知っておるが故に皇誥と廻向文を介紹しておこう。

皇誥：慈心哀求、金闕玄穹主、宇宙主宰赦罪大天尊、玄穹高上帝。

廻向文：願わくはこの祈念を以て、天下蒼生のため毀滅劫を解化し、重大天災を軽減し、大地回春の日の早からんことを。

同胞の諸君、光殿の設立を急ごう。その時機は切迫しているのだ。

（旧暦八月一日・昭和五八・八・一）

(2)、神武天王啓示

大和民族の使命

日本人が大和民族と称しているのは、日本人の遠い祖先が高明であったことによる。日本民族のもつ聡明と魄力とは、日本を世界の脅威たらしめるためのものではなく、命名の〝和〟の上にさらに〝大〟を加え、特に〝大和〟としたことからも明らかなように、一切の事物を調和し、暴戻を化して祥和となし、全人類真の共和を達成するとの意である。

上帝が日本人に示す衷心からの親愛の情は偏愛といったかたよったものではない。上帝は日本人を全世界調和のための使者、全人類のために幸福を創り、愉快な雰囲気をもたらす民族たらしめようとしておられる。つまり、大和民族が上帝の道を誠実に行いうるならば、日本民族の智慧と精神によって世界の多くの危機解消は可能となる。

しかし、大和民族と称しながらも、現今の日本人は、有形・無形の間に、世界の秩序を攪乱してきた。平和の時期に入って、世界各国から〝経済的侵略国〟とされ、戦争の時期には国連により〝殺人侵略国〟とされてしまった。

日本には有史以来、殺傷の場面が不断に継続してきた。平和の時期は極めて稀であり、しかもそれは、次に来るべき戦争の準備期にすぎなかった。

こうした事態の〝結〟（原因）はどこにあるのか。何故に日本は〝大和〟の使命を実行できないのか。

日本人は〝大和〟の本性を失った。そのために、自ら招くことになった災難もまた多いが、現在、日本人は償いようのない禍害を受けようとしている。〝信じる信じない〟の問題を議論するのはさておき、日本の大和種族を救うためには道徳と精神文明を建て直し、天下蒼生のために和平を祈ることが当面の急務になってきている。このことは断じて否定できない。

天帝使者の来日に当り、日本大和種族はこの点をとくと理解しなければなるまい。

（旧暦七月二十八日・昭和五八・九・五）

陰霊の衝動が核戦争を触発させる

天堂にあって超遥の楽しみを享けてきた神明も、今では愉快な気持になれなくなっている。人間界の陰気が大気層を通過して天帝の元にまで達しており、多くの仙仏も人間界からの無形の悪気に影響されているからだ。

地獄には陰霊が満ち、拠りどころのない陰霊が人間界に入りこんだ。人類は霊界から出てくる各種の電波を受けて、自分では全く思いつかぬ不思議な事態に遭いつづけている。

戦争はすでにコンピューター操作の時代に入った。ボタン操作は極めて容易なことだが、人類の自制心を維持することは容易でない。何時、衝動的にスイッチを押すか、誰もこの怖ろしい瞬間的動作を制御できないが、その決定的唯一の素因は衝動に影響力をもつ祈禱の念力だけである。

自制と衝動とは、いずれも眼に見えぬものであるが、災禍を解消できる無形の力量は祈禱のみである。正気のある人を集合して、祈禱の念力による力量こそが、災厄を解消し、禍患を軽減し、無形を有形化し、より多くの善良な同胞を救いうるのだ。

（旧暦七月二十八日・昭和五八・九・五）

目前に迫る子々孫々への患禍

関東大地震はすでに多くの人の記憶から消え、広島・長崎被爆の大劫も新時代の人間の心からは忘れ去られている。こうした大災は歴史的過去のものとして、再び発生しないと信じてよいものか。それには確信がもてるか。極めて畏るべきことではないだろうか。

日本の同胞は、すべて私の血であり肉であり、われわれは霊肉を共にしている。諸君の災難はすなわち私の災難である。私は天上にあって、人間界よりも事情を明瞭に見ることができる。知識も人類よりは多く、ものの見方も優れて客観的である。日本国の前途、子々孫々に及ぶ患禍の来襲が、そう遠くないことを私は知っている。

オホーツク海は黒く臭いものに変り、漂い着くものも多くなって、清澄の海域を汚染している。私はこう自問せざるをえない。日本の救世主はどこにいるのか、と。

さあ、さあ、やって来られたぞ。しかし、なんと静寂なことよ。この静かさが怖ろしいのだ。あのご老人の脚のなんと早いことよ。しかし、日本の跡継ぎたちは聾か唖なのか。

今も事業上の失敗には泣き。大もうけをして一家の団欒に笑う。しかし、それが最後の晩餐であることを知らないのだ。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

覚悟すべき残酷な事実

神武天皇は人間界での封号であり、天上では皇とは称さず神武天王として敬護勅封されている。

この天界は大気層の中の同温層にあり、私は日本修行者と連絡する責任をもっておる。

今日の緊急重要性がはっきりしているだけに最後の講話として次のことを伝えておく：

㈠、全日本の同胞は第一に劫運の怖ろしいことを明白にさとり、第二には日本人としての使命をはっきり悟り、第三には因果関係の残酷な事実を覚悟しておらねばならない。

㈡、各宗派が定期に消災化劫の祈禱を行うよう希望する。それぞれの宗教儀式によって、尊崇する神仏に向かい和平を祈求すること。

㈢、核防止準備の工作をうまく進め、将来に対応すること。
㈣、積極的に上帝の首席使者に追随して、無上のすばらしい能力をもつ光殿を建設すること。
㈤、台湾から来訪した同奮が、日本のために誠心誠意修道するのは何故かをはっきり理解すること。

私が話すべきことは、ほとんど言い尽くした。これ以上語っても空洞のものになり、要領をえぬことになろう。私の心中の悲しみが、意思を声に変えてくれないのだ。

（旧暦八月一日・昭和五八・九・七）

(3)、大日如来啓示

不安な血の円盤

太陽は日本の国旗であり、それは光明正大の意味を示している。私の〝大日〟のもつ意味もまた同様である。このように太陽が大和民族の精神を表示していることの意味には深

いものがあり、それは善美の構想であり上天のご意旨でもある。

しかし、私には旗の中央の太陽が次第に〝血の円盤〟に変ってきたように見える。光り輝く太陽ではないのだ。これは日本の国運を示す光りの照射にかげりが現われ、血の円盤に変ってしまったのだ。

太陽と大和とは合わせて一になるもので、今日の日本が依然として物質面の追求、取り引きの抗争に固執して、積極的な精神文化面の陶冶を忘却するとなれば、その前途は全く希望のないものになってしまう。この点について次に一種の設問を示そう：

㈠、経済構造が大きく変ろうとする時、君はどうするか。確実に財富を保持できるか？

㈡、核戦争が日本に発生しないですむか？大韓航空機事件がそれを示唆していないか？

㈢、当世青少年の道徳的態様がかくも低劣化してきていて、果たして家族の純潔を守りうるか？

㈣、本年の天災、人禍の発生が特に多いのは何故か？

㈤、気象の異常を気象局が完全に予測できるだろうか？

㈥、北海道のキナ臭さは、より濃くなるのではあるまいか？

(七)、東京の建築物が停電・地震に耐えうるか？　どこへ避難できるか？

(八)、物質生活面は恵まれているが、死を怕れないですむか？　精神的拠りどころを見つけているか？

(九)、科学技術の発展は、太空圏にまで延び、太空圏さえも安全でない今日、諸君の住む所は安全だろうか？

(十)、安定した内心の力を養成しなくてはなるまいが、それを捜し求めようと思わないか？

以上、十の設問は極めて現実的なものを提起したわけだが、是非真剣に考えてもらいたい。これらの事は、久しからずして事実となって現われるもので、その時機は極めて切迫している。私とて、これ以上黙しておるわけには参らぬではないか？

（旧暦七月二十八日・昭和五八・九・五）

雪中炭を送る台湾の同胞

祈禱会場では金光が照り映え、ために、陽光も明るさを奪われるばかりであり、私は会

場で金蓮を撒いたものの、これも僅かに錦上花を添えるにすぎぬものであったが、首席使者と信徒同奮の来日は、実に雪中に炭を送る慈愛に満ちたものであった。

科学技術文明の中で生活すると自ら認めている日本同胞は、極大の災禍が眼前にあることすらも知らないでいる。

今回台湾から訪れた霊能者たちは狂人なのだろうか？彼らは台湾で家族をもち、事業を営んでいる。台湾で努力して金を貯えた後、やっと日本を訪れた人たちである。彼らは先知先覚者であり、日本が東南アジアで最初に劫を受ける土地であることを知っている。いろいろな危機が北海で発生していることも見ている。彼らは天命を享けた一群の人たちであり、日本同胞救済のために訪れている。彼らは日本のために泣哭しているが、日本人はこれに全く関心を寄せようとはしない。しかし日本の仙仏はすべて、彼らが来日し、祈禱大会に参集するのを知っていた。彼らの泣声は天上の神明の悲しみの声と一体になった。これこそ天地同悲であり、天人合一の現われである。私は現在もまだ、えもいえぬ感動を覚えつづけている。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

冷えきった北の空

北海道上空に悪い霊気がたちこめ、天魔と天神とが封峙し緊迫した陣容をしき、空気も凍結するほどに緊張している。天門は厳重にとざされ、灰色の雲がたちこめ、一陣の風声は泣きむせぶかのようだ。これこそ天の悲しみの現われか。

一匹の巨大な熊が、凍った海を這いまわり、銀色の大きな掌で荒れる海面を打っている。天使が放った平和の鳩は、重畳の山なみを越え、荒れ狂う海を渡ってきたが、人間の注意をひくべくもない。一群の聾唖にも似た人間たちが、降りはじめた大雪と雪祭りを楽しむ光景は、賑やかでもあり壮観でもあるが、しかし孤独な天使は寒風の中に立ちすくんでいる。

私は大日如来の〝大日〟の光と熱を懸命に照射してはいるが、いまだにこの雪祭りのために寒冷を溶き消すすべもない。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

光殿の偉大な霊験

光殿は急遽設立しなければならない。大型の光幕が設けられた後、日本人の集団祈禱により極めて大きな霊験が現われることを希望します。

光殿の原理と作用を説明しよう：

何故に地上の願いを直接宇宙の中心にまで届け、しかも無上の妙験が現われてくるのだろうか？

この作用は必ず上帝が派遣した首席使者――人間の最高霊能者によって指導されなければならぬが、その順序は次のように一定している：

順序「図面」略

つまり、祈禱者は首席使者の姿を想いながら、首席使者の指導によって、光殿の中で礼拝祈禱の念力を至高無上の上帝の座前に伝える。祈禱方法は、皇誥一句を念誦するごとに一回の跪誦をくりかえすことによって、身・心・意、三位一体になった熱いエネルギーが、上帝に達するもので、この種の修行方法は功徳が最大であり、霊験は最も早く現われ、祈

禱跪拜に当たり、誦唱の回数が多ければ多いほど、百回とか、千回とか、一万回とかになれば、天から降下する光と熱とはますます強くなり、劫運を軽減解消させる力もより大きくなる。

この方式による祈禱効果は、不可思議なものであるから、光殿のある祈禱大会堂を建設することは、当面の緊急な必要事である。

応急の修行・応急の救劫活動は、日本人の魂を覚醒させる警鐘にはちがいないが、前記の祈禱礼拝方式による無上の法門が、救国救民の最良の利器である。

（旧暦八月一日・昭和五八・九・七）

(4)、日蓮上人啓示

道徳は飾りものではない

祭起天桿、幡動、人心は浮動している。私は富士山頂でただ哭泣。かつて蒙古軍の侵入は遂に台風の洗礼を受け徹底的に失敗した。当時の日本は、遠征の蒙古大軍の侵略を免れ

たが、日本の大和の霊魂は反省懺悔を行っておらぬために、遂に天より大きい災劫が急速にふりかかろうとしている。この大難は、私の力では解消すべくもなく、解決は、ただ天帝使者のお力によってのみ可能である。

私は当時もろもろの迫害をうけたが、その苦心については同胞の誰も、よく理解していない。しかし、現在の情勢は核戦争が避けがたいものであることを極めてはっきりと示している。通信・新聞など情報が非常な発達をとげた現代、私ども神仏の立場はいよいよ軽んじられている。信仰の目的が安心の力を得ることにあるとはいえ、道徳の力が日に日に脆さを増して、人倫の道地におちた現在、いうところの〝道徳〟とは一種の飾りものの代名詞になりさがってはいないか？

仏教の封建化・固陋化・因襲化・官僚化は、仏道の真の修行を攪乱させており、寺院の効用も単に人間をして礼拝し幸福を祈らせる場所にすぎず、啓示修心・反省懺悔の効用は完全に消失し去った。さらに寺院の守護に当るべき者も単なる管理者になりさがり、衆生の導師たる面目はみるべくもない。仏門の混乱は腐敗と各自の不逞の結果であり、真の修身成仏の路は閉鎖されている。

宗教大同を説く首席使者

かつて私は妙法蓮華経の一巻をひっさげ、念誦こそが修身のため重要なものだと強調してきた。仏典の説くところは、すべて無形の修心・養性の方法であり、念仏も修心養性に至る手段であるが、念仏修行の者は往々にして単なる仏門の売経者に堕し、仏陀の意旨から遥かに離れてしまった。仏教の罪人というべきである。

真の念仏は、心をこめて念じるものであり、仏心をもって自らを感動させるものであり、他人のために念じ、衆生のために念じるものであり、成仏するためにのみ念じるものではない。

仏教の国に〝自分こそ〟が仏であると称する仏は決していない。衆生を救い、衆生からはじめて〝仏〟と称されるのである。仏は衆生のために活き、劫を救うために活きるものである。日本のすべての仏教徒が、もし成仏の根本義を悟りえていたならば、日本に今日の災禍がおこりえようか。危機のありえようはずもないし、道徳の堕落を心配することもなかったのだ。

身を仏門の主持におく人にとって、これこそ自らの責任であり、道を教える仏教徒に成仏の真意を教え導くことが当面の急務となっている。

天帝の使者には宗教界という枠にとらわれた観念はない。仏教徒も教派の差別観をもってはならない。大和民族の大和とは宗教共和・世界大同の意である。

台湾から来訪した天帝の首席使者は、上帝から派遣され、遠路わざわざ到着されている。私ども仏教者は、当然のことお役に立たねばならない。彼の説くところは、仏国の道理であり、人世修行の根本方法であり、成仏の法言である。

二十字真言による養性

西天の仏界で、私は救劫の仏と称されているが、世界の末劫が迫っている現在、救劫の仏たる私とて、どうすることもできない。

天帝の教化は自然の教育であり、人生の守則とされる忠・恕・廉・明・徳、正・義・信・忍・公、博・孝・仁・慈・覚、節・倹・真・礼・和は、忠からはじまり、和でしめくくられている。この和は大和民族の和であり、すべてを円満におさめるという意味を含んでいる。

人道の修行には、この二十字の真言を反省懺悔・養性の用具となすべきである。日本民族の優秀性は、他人の優点をとり入れ、これを高揚発揮させることに巧みなことにあるが、日本民族の道徳的堕落が大劫を招く原因になった。物質文明の追求は、精神文化への修養をはるかに超えており、頑張りやで負けぎらいの民族性が物質文明建設面にのみ発揮されたことは、悲しい事実を招来することになっている。時間は大和民族にとって極めて重大なものになった。精神面の建設工作が、政府と民間とで大いに推進されねばならない。

毎日の反省懺悔に加えて、さらに日本国運発展のための祈禱・全人類救劫のための祈禱が行われることにより、新たな正気が生じ、この無形の正気によって、日本上空を覆う汚濁の邪気が解消されることになれば、大和民族のためになによりの幸である。

多くの人が充分に自分の力を出して社会のために尽くそうとはしていない。彼らの人生観は、いかにより多くの金もうけをし、より多くの享楽を手にするかであり、性欲の乱れは日本固有の家庭制度を破壊し、上下をつなぐ尊敬の観念は完全に滅び、無節制な娯楽への沈溺は、低迷した利に走る社会的風潮を生み出している。

次代を負う日本人に想いをよせ、種族の刷新活潑化を考えるとき、いわゆる人倫の再建

設こそが、大和の魂を根本的に救済できる道であると確信する。

転換期に到った物質的享楽

霊界で極めて明白に見えてくることは、因果応報の関係である。新世代の日本種族は、その霊魂の来源の中に非常に多くの、かつて日本と戦った国々の因縁をもち、さらに第二次世界大戦で死亡した日本軍人の亡霊の大部分が、ふたたび現世に生まれかわって二、三十歳余の青年に変移している。このために、ふたたび殺伐の声が周囲に怕るべき輪廻として巻き起こることも将来避けがたいものとなろうが、果たしてどのように対処したらよろしいものか？

四十歳をこえた、あるいはそれ以上の年配の日本国民が、その責任を負うことになる。物質的享楽はすでに極点にまで達し、人類が平和に暮らせる日々も限界にきた。今後の事態に備えて、諸君が身を以て範を示し、毎日の反省懺悔と世界平和のための祈禱を提唱してもらいたい。

（旧暦七月二十八日・昭和五八・九・五）

修行すなわち正気

〝成仏〟はいずれの仏教徒も希望しているものであるが、自ら仏教徒と称する多くの人が説く〝成仏〟の過程とか修行の方法は、まだ極めて未熟なものである。

世上にどれほどの宗教が存在するにせよ、また君が学習するものが、いずれの法門に属するにせよ、次の修行条件は必ず備えておらねばならない——

㈠、自助をえて後、はじめて天助を享けうるという道理を体得しなければならない。では自助とは何か？自助とはすなわち自ら奮門することだ。自らの行為に道徳にもとるものが有りや無しやと毎日検討し、有れば改め、無ければ一層の努力を誓い、次第に自らの胸襟をひろげ、天下大衆のための幸福を祈らねばならない。その場合、祈りが誠心誠意のものであるか如何が、これまた極めて重要である。毎日全精力を傾けることにより至大至剛の正気が生じ、これが天と親和し、大衆救済の力量となって現われる。

㈡、修行というものは何も脱世的現象ではない。すべて誠心誠意、心に省みて愧じると

ころなく努力これつとめれば、人間世間の、事業・家庭・妻子・子女・一族・友人など、いずれも間絶することなく相処していけるものだ。つまり、修行とは一種の奮闘であり、あらゆる困難の解決に向かって、退かず、悲観せずすすめば、自ら正気が生じてくる。正気をもって当たる人こそ、自然に天助の力を得られるものである。

㈢、修行者は、上帝・仏仙・神々と共に立つ者であり、上帝の心に通じ、上帝の慈悲の胸中を体得しうる者である。したがって彼の人間的な七情六慾は極めて稀薄なものに変り、胸襟は広寛となり、国際間に発生する大事にも明らかな対応が可能となる。

以上の各点を綜合して知りうることは、修行者たる者は彼がいずれの法門に属するにせよ、積極的に人道に向かって奮闘し、自助自強、心境寛達となることが必須条件だ、ということである。

天帝教駐人間首席使者が特に来日されたのは決して伝道のためではなく、宇宙主宰である上帝の教化の慈雨をこの地に撒布するためである。

危機去って、のこるは空か

すべての宗教は同一の源流から、つまり宇宙主宰の上帝から発しておるもので、単に因縁関係から異なる宗教体系に分派しているにすぎない。したがって、この世界で上帝を最も悲しませるものは宗教戦争である。

首席使者は新しい宗教精神をもち来たって、日本の大和民族が、宗教的修行は単に当面の福寿を求めるためのものでなく、犠牲奉献・救生救人にあり、また修行の方法も浮世離れた神秘なものでなく、通常平凡の生活の中に行われるものであることを理解するよう希望している。さらに重要なことは、大劫が頭上に迫り、危機が急迫していること、およびここに示した修行の三大条件によって、正確な宗教路線を進むことによって惨烈な災禍を軽易消化させることができる、ということを日本人に知ってもらいたいことである。

わたくし日蓮は、首席使者の精神に最大の敬意を表明する。彼の来日は全く犠牲奉献の誠そのものであり、すべての費用は台湾の同奮信徒からの寄進になるものであり、すべての心力は上帝の慈悲から生まれたものである。

ここで承知しておかねばならぬことは、上帝が日本人の上に災禍を降そうとするものではなく、日本人が上帝の道義を捨て去り、宇宙自然の道に反し、自らの滅亡を招きつつあ

ることである。

世界には非常に多くの無残な事件が発生するが、日本の被る災害は、ほかのいずれの国よりも更に惨烈なものになる。天帝が首席を救劫の使者として日本に派遣したのに当たり、全日本の国民は事態の深刻性を認識自戒すべきであり、その日暮らしの酔生夢死は、もはや許されないのだ。

ここに次の警句を日本の同胞へ送る！

末劫残酷の事態が明白に目前に迫ってきたに当たり、ただちに反省・懺悔・祈禱を行いなさい。さもないと、危機がすぎ去れば一切はすべて空、時すでに遅しとなろう。

（旧暦七月二十八日・昭和五八・九・五）

富士祈禱に霊光を見た

太陽が富士山の陰く、濁った空気を破り、首席使者による光幕開光の儀式が行われた時、私は全日本仏教の高霊をひきつれ西側に侍立した。太陽の神が発した無上の威力をもつ陽剛の気は、富士山の山主のために霊光を降りそそぎ、われわれは天界から来臨した仙仏の

祝福をうけたが、内心思わず凄然として感泣が湧いた。祈禱大会には日蓮の信徒も参加した。私は特に彼らにも注目した。台湾から参加した信徒同奮は十分な勇気を以て、資金を出し誠意を尽くし、力を出し、全身に無比の美しい光の輪を現出して、天空の神明仙仏とひとつにとけ合い、ほどなく一片の光り輝く霊光に化した。

わたくし日蓮は、金光の感銘を受けて、心中の疼みを禁じえず、懸命の祈念の中にも流れ出る涙をとめることもできず、心中の感激はとても表現できないものであった。

この日の富士山は、こよなく美しいものであったが、しかし、これは日本の黄昏を意味するものではあるまいか？

日蓮の追随者諸君、どうか天帝教の信徒同奮の諸君を援けて、首席使者の精神的呼びかけのもとで急遽祈禱の行列に加わってください。日蓮の高弟諸君の行動は私を満足させるものであったがさらに具体的な行動で諸君の勇気を示してもらいたい。わたくしは必ず天上にあって諸君を輔佐していくだろう。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

白日は黒夜に変わる

土地は陥没し、天からは火の球が降り、地上には毒気が充満して、突然、激しい火焔が噴き出し、人間は交通渋滞した街道で、方向と目標を見失い、群衆に従ってあてどもなくうごめく。多くの人が腐った屍体を踏みつけて行き、多くの人が酸欠の中で窒息して死に、多くの人が焼けて炭粉と化し、多くの人が神智を失い、多くの人が底なしの坑にころげ込み、寄病が流行して、医者も手の施しようがなく、治安は乱れ、赤信号はいよいよ赤く、犯罪の発生は日常茶飯事。強姦強盗事件はしきりとおこり、地獄の餓鬼は人間界に飛び出して人間と食を争い、地底の夜叉も恐ろしい獰猛な笑いをみせる。救劫の神明は救助に奔走するが、その効もなく、ついに疲れはて倒れてしまう。

こうした事態は、決して事の終局を示すものではなく、その開始の姿である。天空から降った一閃の火光はあらゆる有形の物質、人類・生物を烏有と化し、無形の地祇・遊神・地霊・悪霊もまた同様煙と消え去り、かくて太陽は変色して、黒い陰影となり、天空には黒く焦げた煙霧が充満し、白日は黒夜に変じ、水、水、水、水も飲用にはたえず、空気、

空気、空気とてもその働きはなくなる。水と空気、この二つの養生の糧までが、有毒の殺人武器に変りはてる。

いずれ、ほどなく天上から雨が降りはじめる。この雨は清涼の気をもたらすとはいえ、これを機に病魔が発生し流行する。毒を帯びた雨水はいよいよ広がり、疫病は広域に発生、ついに幸運にも活きのこれる人間は、いよいよ少なく、いよいよ稀になってくる。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

大和民族の反省

本日ここに参ったのは、わが日本の同胞に反省と懺悔の方法、なぜそれが必要か、またどのように行うのかを教えるためだ。まず、個人の面と全大和民族の面とに分けてみよう。

個人面では、良心に愧じるところはないか、友人に、社会に、家庭に、国家に、また全人類に対して誠実を欠くところはなかったか、を検討することだ。こうした反省には、二十字の人生守則が有効な用具であり、就寝前に自己の一日の行動が、この守則を奉じて適

確なものであったかを検討するのだ。この二十字の人生守則は、忠・恕・廉・明・徳、正・義・信・忍・公、博・孝・仁・慈・覚、節・倹・真・礼・和に集約される。

全民族の反省については次の諸点を考えねばならない：

㈠、大和民族の責任とはなにか？

㈡、何を以て日本を太陽の根本と称すのか、それは光明・正大・太和・無私・和平を意味する。

㈢、日中戦争の終結。この血債はどのように返えすのか。日本軍閥か世界各国で行った殺人行為をどのように償うのか？

㈣、カイロ会議で誰が日本から天皇の地位を消し去ろうとしたか。

㈤、戦後、日本生存のため徳を以て怨に報いたのは誰か？

㈥、日本に優れた文化を伝えのは誰か。中華民族と大和民族とは同種同文なのかどうか？

㈦、朝鮮戦争・ベトナム戦争で戦争資材による大もうけをした国はどこか。他人の血肉を財富にかえて、一人占めすることが許されてよかろうか？

この日蓮が日本の同胞として眼前に見るものは、同胞が大和の根本を忘れ、神武天皇の教導を忘れ、戦争の惨めさと痛みを忘れ、落後貧窮の国に対する布施工作を忘れ、太陽の種族として大地をあまねく公平・公正に照らすことを忘れている姿である。

因果関係からすれば、血債は血で返すもの、銭債は銭でかえすものである。日本の興隆は天使の仕事をするためであり、より多くの財富を貯めこむためのものではない。現在の日本がなすべきことは、世界人類のために、いかにしてさらに大きな貢献をなすかということである。個人の反省目標は、本人が正気を打ち建て、日本の受ける劫の因果関係を明白にすることであり、懺悔の目的は、日本同胞が自らの使命に目覚めて努力すると共に、日本国民の一人ひとりが、日本政府の誤った点を認識して、これをいかに修正するかであり、全国の大衆が勇気をもって誤りを認め、政治的に誤った方針を改善し、教育面では不実の歴史記録を修正することである。

こうなれば太陽の光は、日本の同胞の上に新しい光を投げかけ、日本もはじめて救われてくるのだ。

（旧暦八月一日・昭和五八・九・七）

(5)、不動明王啓示

陰気ははげしい東京の空

日本の上空は混沌と汚濁である。これに反し、台湾の上空は平和の金光に輝いている。このことは工業汚染という有形の問題を指しているのではなく、無形の陰陽といった二つの気の消長を比較したものだ。行劫の甚しい地方では、その陰気はますます濃くなるが、台湾の陽気は日本に比べて遥かに明るく盛んである。

私は行劫主宰（神職）定危子として日本で活動するに当たり、その災劫が極めて深刻なものであることを充分に承知している。東京は陰気の最も濃い地帯である。将来の変化は実に慄然想像を絶するものがある。

（旧暦七月二十八日・昭和五八・九・五）

酔生から醒めよ

態度の生まじめさ、生活空間の狭さ、人事往来の煩鎖さが、日本同胞を海外に発展させ外国移民の激しい風潮をかりたてた。

日本社会には無形の一種の階級制度があり、上の下に対する要求には強制性があり、下の上への対応には栄誉感と責任感が漂う。こうした上下交流の慎重さが、日本人の世界における有利な競争を容易なものにしてきたが、日本同胞の致命傷も、実はそこに内在している。新世代のもつアメリカナイズされた思想が擡頭しはじめた現在、従来の社会体系とは次第にそぐわなくなり、日本で古くから守られてきた習俗も侵蝕破壊されてきた。事業に追いまくられ、金銭を追い求めるために、個人と団体を問わず、栄誉的表現からは、すでに精神文化の重要性が軽視され、社会的需要に対応する宗教活動は往々にして全く無意味な交際と個人崇拝の具に堕ちてしまい、思想的な解脱もかなわず、死後の認識についても確固たるものがみられない。つまり現代の日本社会は物質尊崇の社会に変りはてているのだ。

永く久しく、暗く圧えつけられてきた社会生活は、富士山の内にある熔岩のように、いまにも蠢動しかねない。この種の現象は火山のように一度爆発すれば、その収拾は不可能

なものとなる。

天帝教が設けた祈禱大会において、私は、真実の宗教生活というものは、社会と結合するものであり、胸襟を開いてこそ、今日の日本の緊張した社会体系の平衡が保てるものであることを体得した。台湾から訪日した上帝の駐人間首席使者は、悲天憫人の心から、富士山の新五合目の地をトし祈禱大会を設けた。彼は決して布教のために祈禱するものではなく、自らの祖国のために祈禱するのでもなく、ただひたすらにわが国同胞の前途のために天に向って哀求したのである。

諸天・龍神・天堂の仙仏、日本の神祇などこぞって、怕れおののき心から至高至大の上帝に対し日本の惨禍を軽易ならしめたまうよう祈求しているにもかかわらず、人間界の日本同胞は、なお夢中をさまよっている。

彼らは天国の厚い配慮からはずれ、徒らに人間界の雑事に奔走し、天に向かって奮闘する勇気を失い、現実的な思惑が日本人の心を惑わし、横断面の事実のみをみて、縦断面の宇宙の美しさを見ず、物質世界の潰滅という厄運から逃げきれないでいる。物質化された人間は、一所詮、物質と共に亡びる運命から逃避できない。

わが大王は、声を大にして全日本同胞に急ぎ呼びかける：

心霊上の仏国を建設することが当面の急務であり、ふたたび世俗の禍中に沈淪してはならない。毎日の祈禱こそが何よりも第一の重大な仕事である。反省と懺悔とを平常の生活の一部とし、救災救劫という自己の使命観を打ち建てるべきだ、と。

災劫の有無問題を討議する時間的余裕は、すでになくなっている。各宗教団体・会社などの連合による災害解消祈禱大会は、必ず適時に、各宗教がもつ和平祈求の方法により共同して日本同胞に対し、その心の結合を積極的に呼びかけるべきである。

私はさらにこう希望する：

各宗教の主持者は、まず末劫がすでに頭上に来ている事実を明確に認めるべきであると。しかしさらに印証を求める人間がいるとなれば、それは頑固に同化をこばむ者であり、自ら死の路を求めるものだ。諸君は速刻、上帝への祈禱工作を開始すべきだ。各宗教がそれぞれの宗教派別の主神に向かって、人間の奮闘が災劫を解消しうる無形の力量を生み出すよう哀求することになれば、それこそ日本護法の大神である私の、衷心より感激するところである。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

富士祈禱にみつけた一縷の希望

瀬戸内海の海神も富士山に来て祈禱に参加した。彼の地位が低いため、ほかの神祇の関心をひかなかったが、彼こそは富士山主についで、いたく傷心された神である。

かの神はこう語る：

海水は沸騰する熱湯と化し、私の水族は生きるすべもない。数多くの人間も水族の列に加わり、私の水域は墓場になる。海から湧きおこる大水は、地上の人間に恐慌逃避の種をまき、身のおき所もないままに、遂には魚の眷族にまでなりさがる。私は天空の中にあって、震動する大地を見たが、そこには魂を呼ぶ幡布がはためいている。誠に、私はこれら愛すべき同胞と存亡を共にしようと思った。輓歌に応えて、神々が身辺に現われている。私は一縷の希望を抱いた。日本の同胞が一日も早く目を覚ますことを祈る。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

何故の祈禱か

祈禱工作が何故必要なのか、はたしてその効果があるのだろうか、私はその説明をしてみよう：

反省は心の鏡を開くことであり、懺悔はこの鏡をみがきあげることであり、かくして人の心がはじめて太陽の光と熱とを反射し、上帝の光芒をうけて、これを人の身内に転じ射しこますことになる。

祈禱は鏡の拡大であり、小さな面積を全世界を照射する大鏡に変えうる。君が全日本の前途のために祈禱するならば、次第々々に心中の鏡が、全日本のために光熱を放つことになる。君の祈禱が全世界の和平のために行われたものなれば、君の心の鏡は、いずれの日にか全地球をくまなく照らすことになる。

しかし、この反省懺悔と祈禱とは、必ず恒心をもち忍耐を必要とする。深い敬虔さと誠意を以て事に当たり、中途で投げ出してはならない。ここに天帝教の祈禱の詞を附記して、各位の参考にしよう：

祈禱詞（中国文）

天帝—我願奮鬪！（振左臂三呼）

願—神聖人凡通、至誠獲感應！

願—人人去私欲存天理、抱道樂德、回天轉運、人類浩刼化解於無形！

願—拯救天下蒼生、化逓核子毀滅刼、大地早回春！

願—天佑世人、解脱鐵幕無邊苦海、早出火熱水深！

願—自由平等博愛放光明、普照人間社會永遠幸福！

願—國家一統、民族復興、萬國和諧！

願—天下爲公、宗教大同、世界大同！

願—人類互助合作、泯除畛域仇恨！

願—環宇清平、永無侵略戰爭！

志願無盡。身心遵神媒、身心爲蒼生、人心通天心、奮鬪無已、精誠格穹蒼、聖域化開天人！

天帝—大放親和光、我願伸！

宗教の目的は、われわれの潜在能力を発揮させることにあるが、この潜在能力は心の鏡の作用であり、人々が志をたて日本と世界の前途のために願力を発していけば、日本に災劫が生じることはありえない。例えば、

㈠、私の念仏は、世界和平のために念じるものである。

㈡、私の修行静坐は、自分個人の福寿を求めるものではない。

㈢、私の苦行鍛練は、末劫の来臨と布施を行う準備のためである。

㈣、私の神仏礼拝は、世界の和平のため心力を尽くすためである。

㈤、私が末劫来臨を大声で叫びあげるのは、日本人および世界各国の人々の注意を喚起するためである。

私はこう言う：

仏は衆生のためにあり、西の空に上るために修行する仏はなく、自らの打算を図る仏はなく、徒らに成仏たらんために修行する仏はなく、俗界に下って災劫を救わぬ仏はない。仏は活きたもの、人間界にあるものである。天上にある仏にどんな働きがあろうか？　君は本ものの修行をやってみようと思わないか？　人類のために心力を出してみようと考え

ないか？　真の仏になろうとは思わないか？

（旧暦八月一日・昭和五八・九・七）

(6)、富士山山王啓示

朝に道を聴く

私は謙遜な気持でここに参り、首席使者に会見し、その神眼に接し、全く愧じ入るばかりです。富士山の劫運については多くの日本人は承知しているが、その危機を真に体得理解できる人は、そんなに多くないのです。日本精神の代表であるこの大山が潰滅ということにでもなれば、その後の日々は、よりひどい多災多難なものに変るだろう。

台湾から、祈禱を目的に富士山新五合目まで参られた信徒同奮の皆様が示された行動は実に感激そのものです。

今までに今回ほど多くの信仰に厚い人たちが参加した富士山での祈禱大会はありません。私は満腔の熱情をこめて跪泣し、皆様を正視することもかないません。信徒同奮の皆様は、

いずれも神の化身であります。金色・紫光が富士山頂に満ち、神明は号泣し、信者同奮は悲泣しているのですが、無知な日本人は山頂にあって好奇の眼でながめています。彼らに哭泣する者の心の声が理解できたであろうか。

私は光栄なる一員として堅忍不抜の決心をもって上帝の首席使者に従い、共に奮闘致します。台湾から参られた信者同奮の皆さんの赤誠と天真の誠にお応え申上げたい。祈禱に際して、真の犠牲とは何か、修行の目的は何か、天人合一の表現は何か、無形を有形に変える力量とは何かなど、はじめて悟りました。私は〝道〟の真諦をみつけたと思います。中国の孔子も「朝聴道、夕死可矣」と申しています。

私は非常に安心して邁進できます。数百年来の憂愁の総結算ができました。

（旧暦七月二十九日・昭和五八・九・六）

(7)、地蔵王菩薩啓示（結語）

日本守護に当たっておられる各大神仏の以上のお話しから明白なことは、時勢は急迫し

て日本をはじめ全世界の浩劫が非常に怕いものになっているということだ。

人類が遠く天国を離れ、一歩々々幽冥の路へ進む日も近い。天照大神はじめ各神仏は私が総括のため出向くことを希望しておられる。義からもこれを辞すべきでなく、よって一問一答の方式で、多くの日本人が理解できないでいる点を説明しておこう…

問　地蔵王菩薩を請じて、何故に本書の総括が行われるのか？

答　地蔵王菩薩は仏教に言う冥陽の救世主であり、地獄における大菩薩である。行劫の際、大部分の人は天上に上るすべもなく、ただ彼らがよく知りつくしている地獄への路があるだけだ。

人間界が、まさに活地獄になろうとする緊迫した時期にあって、地蔵王菩薩の地位が、いよいよ重要さを現わしてきている。

地蔵王菩薩は、〝吾不入地獄、誰入地獄〟〝地獄不空、誓不成仏〟の、大願力を示して、日本劫数のために総括を行わざるをえない。これは誠に苦痛な結算であり、地蔵王菩薩は衆生の大災難に悲しみ泣くのみだ。

問　天帝教とはどんな宗教なのか？

答　天帝教とは天帝の教化であり、その信徒たちは信徒とは呼ばず、互いに同奮と称している。これは天下蒼生のために共に同じく奮闘するという意味であり、その成員には仏教徒あり、キリスト教徒あり、天主教徒あり、道教徒あり、一般の社会人士がおる。同奮たちはわけへだてなく、互いに助けあっている。異なる宗教から天帝教に帰宗した者が、その従来の宗教を信仰することも一向に差しつかえない。上帝の教化は大同であり、彼我の区別を設けておらず、世界のあらゆる宗教は、すべて上帝の意志を体して教化を進めているからである。

問　天帝教の称する上帝の駐人間首席使者とは、いかなる人なのか？

答　李玉階先生の天命は極めて大きく、かつて上帝の意志に応じて、中国の西華山で修道し、無形の中でその修験により、人間界の有形の難劫を解消し、三界十方に霊通して上帝の左右となられた。世界の大劫が眼前に迫っておると観じ、日本が東南亜で最初の行劫の地に当たり、しかも事態は悲惨なものとなることを察知した。特に諸弟子をひきつれ、

富士山新五合目で日本人のために祈禱したのは、末劫が頭上に迫っている、どうぞ日本人も発願祈禱して、上帝に慈悲救劫を求めてもらいたい。自ら助ける者には、必ず天助があることを知ってもらいたいためだ。さらに天照大神はじめ五位の神々の要請をうけて、天帝教の天人交流の機縁を借りて、心中の鬱積を吐き出し、日本人に忠告し、日本人の覚醒を求めようとするものだ。

問　応急に対しては応急の行動があり、救劫には救劫の良法がありましょう。いかなる行動こそが、最もよく行劫の惨禍を軽減させうるでしょうか？

答　前でも述べたように、反省・懺悔・跪拜・祈誦の方式です。光殿での誦誥哀求には最大の成果が現われる。

問　地獄の鬼道は、どうなっているのか、その情況をお示し下さい。

答　人間界の陰気が非常に濁り、これにひきこまれた悪魔たちが表面におどり出て立ち去る気配がない。各寺社に奉祭されている神仏のお像には、多くの魔鬼がまつわり、立ち

去ろうとしない。人間界に影響を与える修行者も観念が混濁し清澄でなく、成仏は極めて困難である。いうところの宗教精神は、人間界では、すでに異常に紊乱し、往々にして陰霊の攪乱をうけて、これが信仰問題の確執を深めてきている。こんな状態が仏の眼からみて、痛恨事でなくて何であろうか。

問　時機すでに遅しと思うが、大日如来・不動明王・天照大神・神武天王・日蓮上人の五位の大神仏が今日に至って、日本人にどんな道を開かれようとするのか？

答　この五位の大神仏は、無形の霊界にあって日本を見守る任務を負うておられるが、因縁未到のため手のくだしようもないままになっている。

現在、日本が激しい災難を受けようとする緊迫の時機に当たって、天は回生の機を与えておられる。この機会をかりて現身のまま説法を行い、日本人の覚醒を求めることになったのも、誠にやむえない次第ではあるまいか。天上の神明は、かねてより人間界の劫難に対処するすべもなかったが、機縁到来となれば当然それをつかまれるはづである。この書は五位の大神仏が、上帝の首席使者の行動に対応したことについて書かれたもので、上帝

の使者が日本の劫難を救うために来日したことを説明、日本に駐る大霊は当然天機を明示し、日本人に諭告するところがあろう。しかし、日本国民がこの機会を活かし、自らを救い人をも救うために立ちあがるよう願ってやまない。

人類は自ら救うことによって、はじめて天助を得ることができる。劫数の発生はすべて自らが招き、自らが受けるものであって、上天が故意に災劫をくだすことは決してありえないことだ。

問　上帝の首席使者の来日には、ほかにどんな企図があるのか？

答　無償の布施こそ、これを修道と称すべきである。首席使者が台湾から遠く日本を訪れたのは、日本の災劫を救うためである。人を救うため自らを犠牲に捧げる人が、どうしてほかの企図をもちうるだろうか。

日本人は中国人に対して、必ずしも慈悲心があるとは申せぬが、しかし首席使者は、もともと何ものも畏れぬ精神で日本に参ったのであり、これこそ上帝の意旨を奉じた――〝慈心博愛〟〝以徳報怨〟の具体的表現なのだ。

問　台湾の天帝教同奮が、かくも多くの出費をし、多くの時間をかけて富士新五合目を訪れ、日本の災劫を救うため祈禱し哭泣しておられるが、それは何のためだろうか？

答　これら台湾からの同奮は、家庭は必ずしも裕福ではなく、生活の担い手として仕事をつづけている人たちだ。時間的にも余裕はなく、休暇をとっても賃金はそれだけ差し引かれる、全く苦労なことなのだ。しかし「日本の劫難が目前に迫っている」との首席使者の言葉を聞くや、直ちにすべてを投げ出し五十余名の代表が集まり来日して祈禱に参加している。彼らの精神が純粋で誠意に溢れるものだけに、天上のもろもろの神仏も感動して降臨し支援を与えておられる。

祈禱当日（九月四日）の富士山頂一帯は陽光が輝きわたったが、麓は沛然たる大雨が襲来していた。彼らは災難の怕ろしさを体で感じ思はず泣き出し、天上の神仏も共に悲しい思いにひたった。富士山麓の大雨は上天の落涙であったか！

これが九月四日当日の状況であるが、皆さんも実証できることである。日本人も菩提心を発し、台湾からの祈禱参加者に学んで、世界の劫運解消のため想いをめぐらすべきでは

あるまいか！

問 天帝の首席使者は来日されて、日本人がどのように対応することを希望しますか？

答 ㈠ 日本人が全世界に対して負うべき道義的良心的責任にめざめること。

㈡ 大劫が頭上に迫っておる時、いかに自らを救うべきか、日本人にさとらせること。

㈢ 日本の原人（注：新世界創造の最初の人）を救いあげ、大劫後の日本の元気を保存すること。

㈣ 光殿を設立し、それを強固な浄土とし、災劫による全面的潰滅から免れること。

問 首席使者の帰台はいつですか？

答 六カ月の満期がくれば、それ以上は滞在しない。

問 首席使者の在日滞在費用はどこから出ますか？

答 すべて台湾の同奮の発心供養による。この地蔵は、日本人も若干の功徳を積むよう

希望する。

問　地蔵菩薩が何故に天帝教のため、また首席使者のために講話をされるのか？

答　世界に宗教の数は非常に多いが、その多くは自己の教派のための打算である。天帝教だけはほかの宗教のためを考えており、首席使者だけがかくも全力あげて身を捧げておられる。この地蔵菩薩も首席使者に随伴するものである。大劫が面前に迫っている時、こうした人をえて、はじめて〝救災救劫の仏〟と称すべきである。この教え、この人は、すでに一般的宗教の概念の枠を飛び越えており、正に当面日本が求める〝救星〟なのだ。首席使者はじめ祈禱同奮の霊光が真直ぐ高く天に昇るのを見た。実に感動的であった。これこそ真の宗教精神そのものだ。この地蔵菩薩が誠意を尽してお護りする理由はそこにあるのだ。

（旧暦八月一日・昭和五八・九・七）

中国語原文——略——

編集後記

一九八三年十一月二七日午前八時、天帝教首席使者李玉階老師一行の帰台を羽田空港に見送った。出発に当り、李老師は特に日本の識者有徳の士宛として、日本国保衛、国脈護持のために謹しんでその奮起を訴える書をのこし「宇宙主宰たる天帝の日本人民に対する愛護仁慈の念を奉じて来日以来、四カ月余心力を尽したが、八十三の高齢かつ高度工業社会の茫洋たる人海の中にあって、短期間に広く大衆に接し、精神的交流により人心の刷新を図ること」は極めて困難であったと述懐されている。

しかし、大劫世界核戦争の化延、天下蒼生の救済を天帝に向い哀求した富士五合目における祈禱祭典は、日本保衛の大任を負う五大神仏の降臨を受けて厳修され、その啓示は本書に「大和吼声」としてまとめられることになり、さらに三重県菰野引接寺境内をかりて天帝教日本主院玉和殿設立のことも終わり、ここを日本国脈保衛の聖地と定め、有志の奮闘祈禱の基地が確立した。

想うに李老師今回の来日は、その口述によれば天帝からうけた第四次の使命だとされている。世界的核戦争暴発の危機に直面しておる現在、アジアで最先に核の標的となろうと

する日本に来って、大和民族の生きのこり、核による壊滅という大劫の解消を天帝に哀求することが使命の内容であった。

かくして富士五合目での祈禱祭典は挙行された。台湾からわざわざ五十余名の信徒が馳せ参じたものの、日本人のこれに参加する者は、ごく限られた範囲の人士にすぎなかった。世話人一同、その無力を愧ぢ、かつ老師に向い深く詫びた。その際、全力を尽した後、その結果は問はず、幸いに祈禱祭典は五大神仏の降臨もあり厳粛に終了した、徒らに自卑されぬように、と暖い言葉がかえってきた。

何故に異邦日本に来って、その国民の安寧を願い、国脈の保衛を祈禱するのか。こうした実に素朴な疑問を皆一様に抱いた。これに対し李老師は犠牲奉献の教義を説き、修行者として無償の布施であると述べ、日本人が修心・反省・懺悔以って天人親和の境地に、一人でも多く、一日も早く到達されるよう望むと語った。

三期の大劫は突如として襲ってくる。それが核戦争の暴発という形をとるか、あるいは目に見えぬ心理的蘊積が致命的な社会的大混乱として爆発するものか？

いづれにもせよ、日本国の経済的繁栄とは裏腹に国民の無反省と無節操ぶりが、急速に

日本を衰退と破滅に追いやろうとしていることは事実である。なんとしても狂瀾を盤石に復すよう努め祈らねばなるまい。その祈禱修行の基地として光殿の設置が急務となった。幸いに三重県菰野の三論法禅宗引接寺中山法元大僧正の積極協力をえて、同寺境内をかり玉和殿の開設が完了した。法元師の如き俊秀の同志をえたことは日本宗教界の福音であり、日本国再建への明るい曙光であった。まさに天帝の配慮の不思議さに感泣跪拝するのみである。

本書「大和吼声」の出版を触媒として、必ずや全国同憂の士が聖地三重県菰野の引接寺玉和殿に雲集する機運が早急に醸成されることを確信する。日本民族復興の炬火は、まさに正気清純の修行者によって、この地から大きく燃えあがろうとしているのである。

私は李老師の来日から、その帰台まで、ほとんどその身辺に随伴する妙縁をえたこともあって、楊光贊同奮（天帝教天人親和院副院長）が富士山祈禱祭典の際降臨のあった五位の神仏の啓示を接霊筆写した華文を日文に翻訳することになった。勿論、菲才の身、奥妙の真意を誤りなく書き伝えることの困難なことは十分承知しているが、可能なかぎり、理解しやすい辞句を使用し、簡潔にまとめることにした。

文中、いかにも奇異、荒唐とすら思える箇所につき当る読者も少くあるまいが、人間が通常見聞しているものが、いかに狭い範囲の限られたものにすぎないかを想うべきである。人間世界は勿論、この宇宙には目に見えぬもの、耳に聞こえぬもので充満していることを考えるとき、活字の裏に流れる真意を悟る工夫が必要となろう。それこそ天の声を聞くというものだと信じるのである。

出版に当り日華両文を併用する当初の予定を変更して、日文のみ急遽印刷に付した。両文併用こそ、より有意義のものとは十分承知しているが、それは後日第二版印刷の機まで待たせていたゞきたく、ご諒解願います。

本書刊行に当り李老師はじめ台湾の同奮各位から多大な支援を受けてきたことを日本の同胞にもお伝えし、改めて衷心からの謝意を表明します。

一九八三年十二月一日　藤岡光忠記

大和吼声（非賣品）
—中国語書名…大和民族的無形吼声
筆録　…楊光贊（天帝教天人親和院副院長）
審訂者…李玉階（天帝教首席使者）
翻訳者…藤岡光忠（天帝教日本主院代理主教）
発行所…天帝教日本主院玉和殿
〒510-13　三重県三重郡菰野町杉谷二二九五—二
三論法禅宗引接寺内（電…〔五九〕九—六〔四〕〔〕〔〕）
連絡所…〒182　東京都調布市入間町一—四二—三九
藤岡光忠（電…〔〕〔〕〔〕八—〔〕〔〕九九）
〒101　東京都練馬区関町北三—三〇—一
樋口光和（電…〔〕〔〕九〔〕—〔〕〔〕〔〕五）
一九八三年十二月八日刊（初版）